セントヨゼフ女子学園高等学校・中学校

SAINT JOSEPH JOSHI GAKUEN HIGH SCHOOL & JUNIOR HIGH SCHOOL

「愛と奉仕の精神」に基づいた
生徒主体のボランティア活動が未来を切り開く

― 建学の精神 ―
愛と奉仕の精神
― スクールモットー ―
世の光・地の塩

6年間を通して経験する多彩な奉仕活動

建学の精神に「愛と奉仕の精神」を掲げ、キリストの中心的教えとキリストが示した模範に基づく独自の教育を展開しているセントヨゼフ女子学園高等学校・中学校（以下、セントヨゼフ）。三重県津市を舞台に、1959年に高校、1961年に中学校を開校し、中高一貫のカトリックスクールとしてその歴史を刻んできた。2015年1月からユネスコスクールに加盟しており、持続可能な開発のための教育「ESD（Education for Sustainable Development）」を推進。そして、SDGsの実践を通して、持続可能な社会づくりの担い手となる女性の育成に努めている。

教育の特色の1つとして挙げられるのが、生徒たちが6年間を通して経験する多彩な奉仕活動だ。中学1年生でボランティアの基本を学び、2年生以降はより広い視野を持ち、段階的にさまざまなプログラムに参加。体験から学ぶことを大切にしながら、社会との関わりを尊重できる女性へと成長していく。

毎年の夏休みには、「誰も置き去りにしない」をテーマに、炊き出しやフードバンク見学、こども食堂・児童養護施設での支援活動も行われている。ボランティアを組み込んだ教育プログラムをはじめ、セントヨゼフはSDGsの概念が提唱される前から、それに資する社会貢献活動に幅広く取り組んできた。

近年は、キャリア教育の中にSDGsの視点を取り入れたり、校外学習でJICA（国際協力機構）を訪れたりと、さらなる広がりを見せている。また、自然豊かな環境を生かし、教員と生徒が一緒になり、学校近隣にある池の水質調査に励む課外活動なども実施されている。校長の井関智子氏はこう話す。

井関 智子
校長

「本校では、身近なトピックから国際的なテーマまで、『愛と奉仕の精神』を体現するさまざまな活動に挑戦できる環境を用意しています。生徒たちに伝えたいのは、他者に喜んでもらうことが、自分の喜びになるということ。そして、国内外に助けや支援を求めている人々がたくさんいる事実に、目を向けてほしいと考えています」

35年以上にもわたって受け継がれる募金活動「ウォーカソン」による支援

1986年に始まったセントヨゼフの伝統的なボランティア活動が「ウォーカソン」だ。教育や医療の援助を必要としている国・地域を支援するために、生徒たちが津市内の決められた約10キロメートルのコースを歩く。参加者は事前に自分たちでスポンサーを探し、ウォーキング終了後に約束の金額を受け取って募金する。寄付先は年度によって変わるが、インドやチェルノブイリ、シエラレオネ、東日本（釜石）といった継続的に支援してきた地域に加え、近年はフィリピンの学校や国境なき医師団など、支援先も広がりつつある。

新型コロナウイルス感染症が発生する前は、フィリピンに対する支援において、有志の生徒が集められた募金を現地で手渡ししていた。セントヨゼフではグローバル教育の一環で海外研修の機会を設けており、その1つである「フィリピン研修」の中で、貧困地域の学校に募金を届けたのだ。生徒たちはマニラ市スラム地区にあるセントハンニバル校を訪問。現地の子どもたちと交流を重ねながら、親交を深めたという。こうした海外研修はコロナ禍の影響で中止になっているものも多いが、状況が落ち着き次第、再開される見込みだ。

「本校はアメリカの3大学・6高校と姉妹校提携を結んでおり、フィリピンとニュージーランドにも姉妹校があります。今後はこうしたネットワークをよりいっそう活用し、双方の生徒同士で、お互いの国が抱えている問題や共通するSDGsの目標について討論・発表するプログラムも実現できないか模索しています」（井関校長）

「ウォーカソン」での行進風景

また、ウォーカソン自体もコロナ禍においては密になる状況をつくってしまうため、代替企画として「オンラインウォーカソン」が開催されている。10月をウォーカソン月間と位置づけ、生徒が期間中に約10キロメートルを歩くミッションを達成することで、スポンサーから寄付を募る仕組みを構築したのだ。35年以上にわたり続くウォーカソンの歴史は、コロナ禍を乗り越え、これからも途切れることなく受け継がれていくだろう。